「『敦盛』の謡と授業づくりに挑戦しよう」

和歌山大学教育学部：菅道子（研究代表）、上野智子
和歌山大学教育学部附属中学校：那須祐也
和歌山県有田郡有田川町立金屋中学校：関　千晴
和歌山県岩出市立岩出第二中学校：大植祥子

1. はじめに　共同研究の趣旨

学校音楽教育において、音楽文化の相対化と多様な音楽文化学習の機会を保障しようとする動きは1990年代より活発になった。その中で、日本の伝統音楽についても表現と鑑賞を関連づけた指導の在り方について研究が進め荒れてきた。それは、1998（平成 10）年改訂中学校音楽科学習指導要領において、「曲種に応じた発声」で歌うこと、「和楽器については、3 年間を通じて、1 種類以上の楽器を用いること」を明記したことが契機となっている。それから四半世紀近く過ぎているものの、これまで西洋音楽中心に専門性を学んできた教員たちにとって、日本の伝統音楽を指導していくことは、ハードルの高い課題であった。そこで、本研究事業は、大学教員と中学校音楽科の教員とが協同して授業づくりを検討していくことを目的として活動に取り組んだ。

2. 研究の経過

2023（令和5）年

第１回　７月23日（日）　能楽へのいざない：絵本とともに楽しむ「青葉の笛～敦盛」のワークシップ（和歌の浦万葉薪能の会）に参加
第2回　10月4日（日）　能舞台「敦盛」鑑賞（第24回和歌の浦万葉薪能の会）
第3回　12月17日（日）　須磨寺・一ノ谷「敦盛」ゆかりの地を訪ねるフィールドワーク（須磨歴史倶楽部　西海淳二氏ガイド）
第4回　12月21日（木）「謡」の稽古①（講師：観世流シテ方能楽師　小林慶三戦士絵）
第5回　12月26日（火）　同上

2024（令和6）年

第6回　１月８日（月）「敦盛」の授業づくり検討会
第7回　１月 31 日（水）　表現と鑑賞を関連づけた能楽指導 「敦盛」 第１時
第8回　２月５日（月）　同上　第２時
第9回　２月 15 日（木）同上　第３時

3. 本年度の取り組み

能楽の指導をするためには、教師自身がまず能楽に興味をもち、謡や舞を経験し、作品を理解するところから始めることが重要と考え、以下の活動を教材研究の一環として行った。そのため、最初の教材として、教育芸術社『中学生の音楽2・3下』に掲載されている「敦盛」をとりあげることとした。

第 1 回ワークショップ参加、第 2 回能舞台の鑑賞

「敦盛」を題材にした絵本『青葉の笛』（片山清司著　2002　アートダイジェスト）を使い、著者である観世流シテ方片山九郎衛門氏が朗読し、その後、衣装や仕舞についての解説とともに、一

部場面を披露してくださるワークショップに参加した。絵本の美しさ、わかりやすさとともにシテ方の声での朗読は迫力があり魅力的であった。絵本は小中学生対象の授業に多いに活用できるものであった。同観世流片山家による能舞台「敦盛」が和歌山のNPO法人和歌の浦万葉薪能の会主催で上演されたため全編通しての鑑賞を楽しんだ。

第３回　須磨寺・一ノ谷フィールドワーク

一ノ谷の戦いで、若き武将平敦盛の命を奪った源氏の熊谷直実は、心を痛め、無常を感じる。出家した蓮生は、菩提を弔うために一ノ谷を訪れ、敦盛の霊と再会し、仏縁によって真の友になるという話である。神戸市須磨寺には、敦盛ゆかりの笛（青葉の笛）、首塚があり、近くの一ノ谷には敦盛塚が史跡となっている。現地のガイド須磨歴史倶楽部　西海淳二氏に案内していただき、一、能楽作品として接していたものがリアルな史実として感じられるものとなった。

第4、5回　謡のお稽古

「敦盛」の演目について、ことばと謡の表現の違いを体験するためにシテ方能楽師小林慶三先生のもとでお稽古していただく機会をもった。謡本とともに線譜も用いて、音楽科授業としての活用についての検討を行った。

第6回　授業づくりの検討、第7～９回　授業検討会

第1～5回までの謡の稽古、鑑賞、フィールドワークで体験したことを活かした授業づくりについて検討を行った。今回は、試行的に謡と鑑賞を関連づけた授業を実施する予定である。今後は国語科、社会科、美術科など他教科統合的な授業づくりについてさらに検討していきたい。

第１回　ワークショップ
写真　１絵本ともに

第３回　フィールドワーク
写真２　須磨寺

写真３　源平の庭

写真４　敦盛塚

第４，５回　能の稽古
写真５　観楓会能舞台

第６回　授業づくり検討会
写真６　検討会の様子